

## 学 位 論 文 内 容 の 要 旨

学位申請者	臺丸谷美幸【論文博士】 (ジェンダー学際研究専攻 平成26年3月単位修得退学)	要 旨
論 文 題 目	冷戦初期における日系アメリカ人の朝鮮戦争従軍経験 ージェンダーとエスニシティの視座からー	<p>本稿は、朝鮮戦争（1950-1953 年）に従軍した日系アメリカ人二世について考察し、米国におけるその社会的役割を描くものである。朝鮮戦争期の二世兵士は「冷戦の兵士」(the Cold War soldier)としての社会役割を果たしていたのではないかという仮説を立て、これについて検討を行った。彼らは「反共の担い手」であると同時に、「リベラリズム」が推進する人種統合の象徴であったという解釈である。</p> <p>これまでの二世兵士に関する先行研究では、第二次世界大戦期における人種隔離部隊に主な焦点が当たり、朝鮮戦争期についてはほとんど検討されてこなかった。だがトルーマン大統領によってエスニシティとジェンダーを軸とした大規模な軍備再編が進められ、その中で朝鮮戦争は初の「実戦」となった。</p>
審 査 委 員	(主査) 小林誠 教授	<p>本稿の分析視角は以下の二点である。はじめに、従来の「大戦後」における日系二世の動向として問題を立てるのではなく、「冷戦初期」のそれと捉える。次に二世兵士を取り巻く冷戦初期の社会の再編をエスニシティとジェンダーの視点から検討する。手順としては、第一にハリウッド映画作品の表象分析、第二に従軍経験者が執筆した自伝作品の分析、第三に自伝の執筆者やその他、退役軍人へのインタビュー調査分析を行った。</p> <p>仮説の検証について言うならば、朝鮮戦争期の二世兵士は「冷戦の兵士」であったが、それは当時の政府による政策や理念だけに起因して生み出された二世兵士像でなかった。当時、「冷戦リベラリスト」たちが人種平等や「リベラリズム」を実現しようとした結果としてシティズンシップが編成されたのであり、さらに実際に従軍を経験した日系二世たち自らの行動がこれらを生み出したのであった。朝鮮戦争期の二世兵士はその後の社会における日系人のモデル・マイノリティ像形成の一端を担っていたと解釈でき、またこうしたシティズンシップの再編においては大きなジェンダー・ギャップも存在した。だが、朝鮮戦争は米国に明確な勝利をもたらさなかったため、朝鮮戦争期の二世兵士像は米国社会において短期間のうちに姿を消し、今日では「見えない」存在となっているのである。</p>
	戸谷陽子 教授	
	申琪榮 准教授	
	小玉亮子 教授	
	小林富久子 城西国際大学大学院人文科学研究科客員教授	